

## 中国の虞と夷蠻の呉

手塚 隆 義

### 一

虞は春秋時代に山西省平陸県にあった国であるが、晋が河南省陝州にあった虢を伐たんとした際に、晋軍に国内通過を強要され、これに応じたために、反ってその滅ぼすところとなった。西紀前六五五年のことである。呉は改めて云うまでもなく、春秋の中期以後に楊子江下流域の江蘇省の蘇州方面に興り、一時は頗ぶる強盛を誇ったが、西紀前四七三年に、新興の越の併すところとなった国である。

ところが、この虞と呉について司馬遷は、史記の呉太伯世家の賛に

余、春秋の古文を讀みて、すなわち中国の虞と荊蠻の句呉とが兄弟なるを知れりと云っている。

遷が、このように云うのは、同書の冒頭、すなわち呉の建国を記したところに、呉が周の太王の子で文王の伯父に当る太伯

と仲雍の兄弟に始まり、仲雍の次ぎに子の季簡、さらにその子叔達が立ったのに続けて

叔達、卒して子の周章が立ちぬ。このとき周の武王は殷に克ちければ、太伯・仲雍の後を求めしに周章を得ぬ。周章は己に呉に君たりければ因って之を封じ、乃ち周章の弟なる虞仲をば、周の北なる故の夏の虚に封じぬ。これを虞仲と為す。列して諸侯と為る

と記しているのを指すのである。

なお呉太伯世家には、周章以後に熊遂・柯相・璽鳩夷・余橋・疑吾・柯盧・周繇・屈羽・夷吾・禽処・軫・頗高・句卑等の諸王の名を連記して

このとき、(句卑の呉王たりしとき)晋の献公は周北の虞公を滅ぼしぬ。晋に開きて虢を伐たしめしを以てなり

と、虞の滅びる頗末までを挿入し、さらに呉に於て句卑より去育を経て寿夢の即位を記し

寿夢の立つや、呉は始めて益々大にして、王を称しき。太

伯の呉を作りしより五世にして武王は殷に克ちて、其の後ちを封じて二と爲す、その一は眞にして中国に在り、その一は呉にして夷蛮に在りき。十二世にして晋は中国の虞を滅ぼしぬ。中国の虞の滅びてより二世にして夷蛮の呉は興りぬ。太伯より寿夢に至るまで十九世なりきとまで云っている。

すなわち、司馬遷は眞と呉とはそれぞれ中国と夷蛮とに別れて存在はしたが、元来は周の太王の子より出た、同祖兄弟の国であることを、信じて疑がわなかったのである。

## 二

春秋の末に、江の下流域に興った呉が、周の祖である太王の子に始まると云うことは、太王の三子の太伯・仲雍・季歴の内で、末子の季歴が賢くて、更にその子の昌に聖瑞があったので、太王はまず季歴に家督を譲って、やがて孫の昌に及ぼそうと欲したのを、太伯と仲雍とが察知して、荊蛮に奔って句呉と称し、文身断髮して用うべからざるを示して季歴を避けた、荊蛮もその二人の義に感じて、千余家がこれに帰属し、太伯を立てて呉太伯としたと云うので、これが呉国の始まりで、太伯には子が無かったので弟の仲雍が継ぎ、その後は仲雍の子孫が相継いだと云うのが、史記の呉太伯世家にみえる呉の由来で、すこぶる有名な話である。

しかし、呉が周の太王の子である太伯と仲雍に始まる、すなわち周室の一族の姫姓の国であるなどと云うことは、もとより

次兄とをさしおいて、末子が家督を継ぐ話が伝わっていたのであろう。

しかし、周室の祖である文王昌に幼くして聖瑞があったので、祖父の太王が先ず昌の父である末子の季歴に、家督を継がせることを望んだとか、その季歴もまた頗る賢明であったなど云うことは、すべて末子の相続と云う事実を、説明装飾したものであって、周室の祖に尊嚴を加えるために施された潤色にすぎないであろう。兄達が家を去ったことが、父の意を察しての孝道にもとく行動などと説明されるに至ったのは、周の社会がまったく長子相続に移行し、末子の相続が常態で無くなったから、ものであるに相違ない。後になって周室の祖に関する話が、すべて修飾美化せられなければならなかったことは、云うまでもないことである。

## 三

春秋時代の楊子江流域一帯は、黄河中流域のいわゆる中原とは、大いに趣むきを異にして、いわゆる先王の道を非とする馭舌の蛮の住地であった。したがって顓頊高陽の裔を称する楚、禹の後と称してその祀りを奉じた越、ここにとり上げた呉、いずれも中国人の国では無く、<sup>(6)</sup>そしてこの方面では兄弟相続が行われていた。<sup>(7)</sup>

史記・呉太伯世家には、西紀前六世紀に即位した、呉の事実上の最初の王である寿夢の卒した後に

寿夢に子四人ありき。長を諸樊と曰い、次を余蔡と曰い、

信じ難い<sup>(1)</sup>。呉が国として中原の諸侯などと交渉をもち始め、国としての活動を始めるのは、寿夢(西紀前五八五—前五六一)の王となった頃、すなわち西紀前六世紀の前半のことであって、それまでの呉は史記の呉太伯世家などの記事をもみても、単なる王名の列記に過ぎず、その内容は頗る空虚で、歴史的な事実を記述したものは解し難い、大体、呉国の歴史の始まるのは、寿夢の頃よりのことである。<sup>(2)</sup>

してみれば、呉が周と同祖などと云う話は、後に作爲せられたもので、そしてそれも呉の側で作られたものであろう。しかし、周の祖先に関する話まで呉の側で創作することは不可能であって、周室の祖に関して伝わっていた話を利用したもの、と考えられる。おそらく末子に家督を継がせようとして、二人の兄が出奔した話などは、周室に伝わっていたのであって、その話の根底には周代の末子相続が反映していると思われる。王国維氏は、周代以前の殷朝に於ては兄弟相続であって、周代に至って父子相続に変わった、すなわち兄弟相続より父子相続への移行が、殷周革命の本質であるとされ、これに対し貝塚茂樹氏は、殷代——すくなくも殷墟晚期——には父子相続制は完成した、しかし周室に於てはなお小子相続制であったが、周公が前代すでに成立していた父子相続制を模範としてとり入れ、制度化したとされた。いずれにせよ、殷末とか周初とかには、全面的ではないにしても社会の一部に於て、末子相続の風が残存していたのであろう。周室の祖となった「家」にあっても、嘗てはそのような相続が行われていたので、周室の祖に関連して長兄と

次を余昧と曰い、次を季札と曰いき。季札は賢なりければ、寿夢はこれを立てんと欲しき。季札は譲りてきかざりければ、ここに於て長子の諸樊を立てて事を撰行し国に当らしめき。

王諸樊の元年、諸樊すでに表を除くや、位を季札に譲らんとす。季札、謝して曰く、

「曹宣公の卒するや、諸侯と曹人は曹君を義ならずとして、將に子臧を立てんとしき。子臧は之を去りて以て曹君を成せり。君子曰く、能く節を守る、と。君は義嗣なり、誰れか敢て君を干さんや。国を有つは吾が節に非ず。札は不材なりと雖も、願くは子臧の義に付かん」と。

呉人は固く季札を立てんとす。季札は其の室を去りて耕す。乃ち之を舍けり

とあって、それでも諸樊は断念せずして、遺言して次弟の余蔡に位を授け、兄弟相繼ぐことによつて季札におよぼし、父王寿夢の意志を遂げさせようとした。これが実行せられて、季札の王たるべき順が来ると、彼は逃れ去ってしまったので、呉人は止むなく、「王の余昧は後に立てり。今、卒す。その子まきに代るべし」として、余昧の子の儼を王位に即けたと云う。その後の季札の動静は、まったく判らない。

季札が父の意に反して位を固辭して受けなかった理由は、長兄の諸樊に「君は義嗣なり、誰れか敢て君を干さんや」と云ったことで明らかである、すなわち長子相続の正当を主張しているのであって、やがて兄達が相繼いで遂に己れの番が来ると、

あくまで位を継ぐことを拒んで所在をくらましてしまったのである。いわゆる「延陵の季子」として有名な季札に就ては、齊・魯におもむいて、諸國の樂を評した言などが、長々と史記の吳太伯世家に載っているが、このような人物像は、あくまで後進國であつた吳にも、このような中原の人士に劣らぬ教養ある人物のあつたことを誇示する為めに理想化されて画かれているのである。しかし、彼れが義士として讃えられる理由の主なるものは、あくまで父の意に背いて位を受けなかつた点にある。このような道德観は、すでに長子相続の成立した中国社会のものを基準としているのであつて、季札は終始中國流の義人として画かれているのである。

吳の寿夢の後の相続を観ると、寿夢が末子の季札に位を継がせんとしたのは末子相続の風が窺われ、季札に致さんとして兄達が相い難いだのには、兄弟相続の風がみられる。しかし、本来、兄弟相続がある特定の弟に継がせる為めの、手段として行われた、などと云うことは考えられないので、おそらく寿夢の頃には、この地方に兄弟相続の風が存したのである。吳の始祖である太伯に、子が無かつたので弟の仲雍が継いだ、などと云うことも事実かどうか疑わしく、やはり兄弟相続の反映であらう。

太伯・仲雍の話と、諸樊・余蔡・余昧の話とを比較すると、前者はおそらく周に伝わった話であり、後者は吳の話である。しかし、ともに末子——前者では季歴・後者では季札——に継がせようとする父の意に沿うために、まず順序として兄弟相続

が行われようとし、または行われたのであるが、前者は兄達の出奔となつて末子の相続が実現し、後者は兄達の相続が行われて末子の継ぐべき順となると、末子の出奔によって実現しなかつたのである。

この二つの話は、まったく相反したことのようみえて、そのテーマは頗る類似し、いわば同巧異曲とも云うべきものである。もとより二つの話は、それを生んだ社会も時期も違ふのであるが、一は吳の建國の由来話としてあり、一は吳の事実上の建國とも云うべき寿夢のときに存しているのは、偶然とは考えられないのである。

#### 四

吳が太伯・仲雍に始まるなどと云う話が、事実を伝えたものでないとするれば、このような話は一体いつ頃、いかなる人物によつて、どのような意図のもとに作られたか、と云うことが問題になる。しかし、吳が大体國を成して中原の諸國などと交渉をもち、同族で早く國を成した楚などと争うようになったのが、ようやく寿夢の王たりし頃、すなわち西紀前六世前半のことであれば、このような話の作成せられたのも、そのあたりに当てざるを得ない。

なぜならば、吳がここに蛮夷を卑しめ排斥する風潮の強い中原の諸國と交わり伍し、強力な楚に拮抗してゆくには、建國の由来を説いた立派な話を、是非とも必要としたであらうからである。そして、このような考えに立つて寿夢の頃に、かゝる話

を吳のために作成する人物を求めれば、申公巫臣においては他に発見できないであらう。

申公巫臣の生涯、とくに吳に於ける活動については、かつて浦川源吾氏の詳細な研究がある。氏は「左伝の史料的价值の問題を超越して兎に角事件の終末を書き纏めた」とされ、必ずしも左伝の伝える巫臣の経歴に、全幅の信をおかれてはいないが、彼れが楚より晋に趨むいて、楚に対する復讐心から、晋が楚に苦しんでいたのを利用して、使者として吳に使いし、射御の術や乗車、または戰陣などを教えて吳を強くし、それとともに吳が蛮夷の國で中原の諸國などとの交際応接の法も知らぬので、己れの子の孤庸をしてこれに当らせた、すなわちこのような巫臣の努力貢獻によつて、未だ頗る未開の状態にあつた吳が開化し、初めて中原諸國にも通じ、一躍強國の楚を東方より脅やかす新興勢力となつて、歴史の上に現われるに至つたことは事實であらう。

吳の建國に関する話が、巫臣によつて作成せられ教えられたとすれば、彼れは吳室の祖を周室の一族とすることによつて、辺境の後進國である吳を、中原姬姓の國と対等の立場に置き、顛項の裔などと自称しながらも、一方では自から蛮夷たることを裏書きするような言動を取つて排斥されている楚に対し、國がらの上からもむしろ上位に立たせようとしたのであらう。

彼れがこのような吳の建國の話を作成企てた際に、周室に古くより伝えられていた末子の家督相続のために、二人の兄が家を棄て逃れ去つた話は、利用し以て吳の祖とするのには、絶

好の材料であつたらう。またこの作者にとつては、西紀前六世紀の頃に吳に末子相続の風が行われていたので、(楚に於ても同じく行われていたが)周室に関連して伝わっていたこの末子が相続する話は、以て借り來つて建國の由来を作成するヒントを与えたことにも、なつたであらう。

ここに於て、家を去つた二人は、はるばる遠く江の下流域の荊蛮の地にまで奔つたことにされた、しかし、江流域一帯の地は古くより被髮文身の民の住むところである。ここに先ず國した楚も、後れて國した越も、吳ももとよりこの風俗たるをまねかねない。寿夢の先はもとより、彼れ自身も恐らくは文身の民である。

しかし、いかにしても理由無くして周室の一族たるものを文身被髮の蛮風に化せしめるわけにはいかない、よつて太伯と仲雍の文身は「用うべからざるを示し」て、以て「季歴を避け」る手段として行われた、と説明づけられた、一たびかゝる蛮風に身を委ねては、もはや名家の相続人たる資格は喪失されたことになるからである。このようにして、吳室の文身の風俗は、孝子達が父の念願を果す孝道の発露として止むなかつた、窮余の策として行われたことと説明されたのである。そしてこの孝子に関しては、多くの後日談までも付け加えられることにもなつたのである。

吳とか越とか江の流域に住んだ aborigines が、身体に tattoo を施していたのは、水中に沈んで魚貝を採る際に「以て蛟龍の害を避け」ようとする magico-religious の觀念に依る禁魔・

符咒として行われたものであるが、呉の場合には話の作成者によって、このように巧みに利用され歪曲されてしまったのである。<sup>(14)</sup>

そして、この巧みに作成せられた呉建国の由来は、やがて次第に拡まり且つ信じられるようになったらしい。西紀前四八二年に黃池に諸侯が会した際に、晋の定公が「姫姓に於ては我れ伯たり」と、長たることを主張したのに対して、呉王の夫差が「周室に於ては我れ長たり」などと豪語しているのは、呉の国祖が周の文王の伯父である太伯と仲雍であると云う自信が、かく云わせているのであろう。<sup>(15)</sup><sup>(17)</sup>

## 五

虞については、その記されたところは極めて乏しい。春秋の公羊・穀梁の二伝には共に見えないが、左伝の桓公十年の「伝」に虢公が虞に奔ったこと、虞公と弟の虞叔が争って、虞公が共池に出奔したことが見える。西紀前七〇二年のことで、どれほど信のおけることが判らぬとしても、可成り古くより在った国であろう。それにひきかえ、虞の滅亡する因をなした虢は、国も大きく強国晋などとの交渉も多く、したがって文獻や遺物の方面より研究が試みられている。<sup>(16)</sup><sup>(17)</sup>

虞に関してやや記事が豊富なのは、すでに滅亡に瀕した頃で、左伝の僖公二年（西紀前六五八年）の条の「経」に

虞の師・晋の師、下陽を滅ぼす

とあるのについて「伝」に、晋が虢を征するために、虞公に賄

將に虢をも滅ぼさんとす、何ぞ虞を愛さんや云々

とみえているのは、晋が同姓の我が国を伐つおそれ無しとする虞公の樂觀説に対し、宮之奇が諫めるために虞と虢との始祖のことを述べているのである。<sup>(19)</sup>そして左伝の僖公五年——公羊・穀梁の二伝には、まったく見えないが——の条の「伝」に、これと殆ど同文が見えるのである。<sup>(20)</sup>

したがって司馬遷が、呉太伯世家の贊に、「余、春秋の古文を読み、乃ちわち中国の史と荊楚の句呉とが兄弟なるを知れり」と云ったのに対し、この「春秋の古文」は、左氏春秋であるとの解釈も行われるが、もし当たっているとすれば、晋世家にみえる虞公と宮之奇との問答の記事なども、遷がやはり左氏伝より採ったと解するのが当然であろう。しかし、左伝の作者や編纂の時期に関しては、古くより多くの異論が行われ紛々として未だに決定しない。この「春秋の古文」の意味するものも、「春秋その他の古文書」の意と考えれば、必ずしも左伝を指すと決定することはできない。もしも左伝が前漢末の著作と考えるならば、<sup>(22)</sup>虞公と宮之奇の問答の条などは、反って左伝が史記より採ったものとの考えも成立しよう。

しかし、いづれにしても司馬遷が史記を編述するに当って渉獵した諸資料の内に、あえて左伝では無いにしても、呉の建国の由来話や、呉と虞とが兄弟の国であると云うことなどを記したものが、存したことは疑いないのである。

## 六

して軍隊の国内通行を求め、晋と虞とが共同して下陽を滅ぼしたことを記し、同じく五年（西紀前六五五年）の「経」に

冬、晋人虞公を執る

とあるのに対し、「伝」に晋の文公が再び虢を征しようとして、また虞に道を仮りようとし、虞公が宮之奇の諫止を容れず許したために、虢とともに虞も滅ぼされるに至った顛末が記されている。

虞については、この滅亡の際の話は広く知られていたとみえて、晋の誘惑に対して虞公を諫めた宮之奇のことや、諫むべからずとして国より退去した百里奚の話が、国語や孟子に見えている。<sup>(18)</sup>しかし、それに引きかえて建国当初のことなどは、ほとんど見られない。

虞が仲雍より四代目に当る周章の弟の虞仲が、周の武王によって封じられた国であると云うこと、すなわち呉と虞とは兄弟の国であると言うことは、前掲の呉太伯世家の記事以外には、これを証する材料はすこぶ乏しい。ただ史記・晋世家の献公の二十二年（西紀前六五五年）の条に、晋が復た虞に虢を伐つための道を仮るの申し入れに対し、許そうとする虞公と、不可とする宮之奇との問答に、虞君が

晋は我れと同姓なり、我れを伐つべからず

と云ったのに対し、宮之奇の言として

太伯・虞仲は太王の子なり、太伯亡げ去る、是を以て嗣がざりき。虢仲・虢叔は王季の子なり、文王の卿士と為りき。その黜の記せるものは、王室に在りて盟府に藏せり

呉が周の文王の伯父にあたる太伯・仲雍の兄弟に始まると云う話がある意図によって作られたとすれば、呉と虞とが兄弟の国であるなどと云うことも、同じくなんらかの目的があつて作成せられたもの、であることは明らかであろう。

呉と虞とが兄弟の国どころか、なんら関係の無い国であることは、両国が建国以来まったく交渉をもった形跡も無いことでも判るが、呉の建国の話が、寿夢の頃に申公巫臣に依つて作られたとすれば、虞国成立の話が作成せられたのも、もとよりそれ以前に遡ることはありえない筈であり、おそらくはこれまた、申公巫臣によって作爲され、呉の建国の話に付会せられたものと考えられる。

なぜならば、虞国の成立した話は、呉にとって利とはなっても、虞としてはなんら益となるところが無い話だからであつて、従つてこのような話は、虞とは関係なく呉の側で作爲せられたものであることが、推察せられるからである。

大体、虞は晋によって滅ぼされたのすらも、すでに西紀前六六五年のことで、呉に寿夢の王たることに先きだつこと実に七十年である。虞が当時まだ国をもなしていないような呉と、同祖兄弟の国などと云うことは、できない筈である。たとえ万一にも江蘇の方面に微かながらも、後の呉の祖の勢力が抬頭しつつあったと仮定しても、そのような辺境蠻夷との関係を唱う筈もないし、唱つても虞にとってなにか益するところが無いことは、云うまでもないことなのである。

このように考えると、虞の成立した話などは、あくまで呉の

側で作成したものと考えざるを得ないが、それならば呉はいかなる目的で、ただ呉の建国の話だけで満足せず、さらに虞などまでも引合いに出して関係づけたか、と云う疑問が当然起るのである。

呉がたとえ自から、いかに周の太伯・仲雍の後などと称し宣伝しても、春秋の代には周室の承認を得ていなければ、正式に姫姓の国として、中原の諸侯に遇してもらうわけにはいかない。武王は殷を滅ぼすと、一族を封建した。呉も姫姓であると云うならば、ここで当然封建のことがなければならぬ筈である。

建国の由来を作成するのに、周到な作者がこの重大事を等閑に付するわけがない。ここに於て、聖徳を以て新王朝を開いた武王が一族を封建した際に、嘗て己れの祖父季歴に家督を譲るために出奔した太伯と仲雍の子孫を放置しておくことは無い筈であり、当然搜索が行われたこととされた、その結果として仲雍の曾孫にあたる周章の発見となり、当然中原に封じようとしたが、すでに呉に君となっていて如何ともすることができない。ここに於て止むなく周章を呉王に封ずることにし、——ここで、呉が正式に武王によって封建せられた一族の国であると云うことの確証をあげているのである——しかし、そのみでは武王が太伯・仲雍の子孫に報いようとする熱意は、充分果される筈はないので、周章の代りとして弟の虞仲を夏の墟に封じて、ここに虞国が成立した、としたのである。<sup>(23)</sup>

申公巫臣は、楚を去って晋に趨いた人物であるから、晋によって滅んだ虞のことなどは、もとより知っていたのであろう。

にしばらく以前まで存続していた、などと云う話を付け加えることは、寿夢以前の呉に関する話にも、一層の信実性を与えることに大いに効果があったであらう。

しかも、一面よりみれば、弟の国である虞がすでに消滅したと云うことは、後に残った兄の国の呉に、奮起を促がすことにならなくもないのである。もとより呉と虞が兄弟の国であることを疑わなかった司馬遷は、そのような意図に気づく筈もなく、

中国の虞の滅びてより二世にして夷蛮の呉は興りぬと云っている。しかし、この文章はただ虞と呉との興亡の時期を冷静に記述しているとのみは思えないので、慷慨家たる遷が、中国の呉たる虞が滅び、これに代って夷蛮の虞である呉が興隆したことに、なんらかの因縁を認め感慨をこめて述べた言と解される。してみれば、この話の作者の巧みな意図は、たしかにその辺にもあったと思われる。

このように考えると、話の作者がすでに滅んだ虞を、呉の兄弟の国にしたであげた意図の底には呉をして、中原の呉である虞がすでに亡いうえは、夷蛮の虞たる呉が代って、興隆すべき天運の巡りあわせであり、その責任を自覚せしめて、奮起を促がす意図があったものと考えられる。

いわんや、この物語りの作者が、呉を鞭撻し奮起せしめ、その力を利用して楚に仇を報いようとする、復讐の念燃ゆるがごとき申公巫臣であったことを考えれば、なおさら納得がゆくのである。

宮之奇や百里奚の虞の滅亡する際の話のときは、孟子に見えているのでも、後世までよく知られていたことが判る。これらの人材が居たことから、虞は強国の晋に圧倒せられ武力こそ強かったとは思われないが、文化の点より云えば決して低劣な国であったとは考えられない、すなわち春秋の代に往々みられる中原に在って高度の文化こそもつが、武力においては辺境新興の朴強に如かなかった小国の一つであったろう。この中原の文化圏と関連せしめることは、蒙昧の域を脱し中原なみの文化の紐いを凝そうと努める呉にとっては、頗る好都合であることは云うまでもない。しかも、その虞はすでに滅んで、呉が同祖兄弟の国などと宣伝しても、もはやことさら異議をさしはさみ、苦情の出るおそれは全く無いのである。

また二国を関連づけるのに好都合な点は、国名の呉と虞とが同音なことである。むしろ同音であったことが、虞が呉と兄弟の国として選ばれた有力な理由の一つであらう。呉は越が于越(於越)とも記されているように、句呉(勾吳)なども記されているが、むしろ句呉とか于越とかの文字の方が、原音に近いのであろう。それでなければ、殊更に字としては意味の無い句とか子とかを付けて記している筈はあるまい。しかし中国式に略して呉の一字名で表わせば、呉と虞との音は頗る近い。このようにして、虞は呉の兄弟の国として採りあげるのに、好適な条件を多く備えていたのである。

周の武王によって周章が正式に呉の君として承認せられたとき、弟の虞仲が兄に代って中原に封じられ、そしてその国は現

註(1) 和田清博士「東亜民族発展史序説」(東亜史論叢・四三三—四一頁)

(2) Ed. Chavannes; Les Mémoires historiques de Seïma tsien. État de Ou pp. 32

(3) 橋本増吉博士は、この話を儒教の孝悌の道を説いて孝子の面目を表わすとともに、兄弟侯位の争奪を訓戒した思想界の産物ではないかとされ、末子相続の古風を伝えるとする説を疑っておられる「支那文明の発達」(世界歴史大系・第一篇・二三三—四頁)が、周初に末子相続の風がなお存したとすれば、この話が末子相続を反映していると解しても過りあるまい。ただ儒家の孝道の立場より潤色せられていることは、云うまでもなからう。

(4) 「殷周制度論」(觀堂集林・卷十・史林二)

(5) 「金文より見た周代の文化」(中国古代史学の発展・三四二頁)

(6) 和田清博士(東洋史上より観たる古代の日本・六—八頁) ハバート・燕京・同志社東方文化講座第九輯  
(7) 呉の寿夢の四子の話とともに、楚の共王(西紀前五九—前六一年)が、五子の内より嗣を選ぶために神判を行った際に、末子の棄疾が未だ幼児であったのに神意に叶った、四人の兄達は相繼いで立ったが、いずれも不遇におわった、やがて棄疾は立って平王(前五二九—一六一年)となり、神符のごとく楚の祀を継いだ(史記・楚世家)などと云うのは、兄弟相続の風が存したことを示す話であらう。そして、この

平王の治世は、大体に於て寿夢のそれと同じである。この頃には、江一帯の地に兄弟相統の風が存したのである。

(8) 呉の寿夢の四子の話や、註(7)に述べた楚の共王の五子の話は、ともに末子に継がせるために、兄達が順次相継ぐことになっている。白鳥清氏の説かるごとく兄弟相統が、末子相統より長子相統に移る一段階とすれば、「古代日本の末子相統制度に就いて」(白鳥博士選暦記念東洋史論叢・六〇一頁) 呉や楚の地方、すなわち江の流域一帯には、西紀前六世紀頃には、末子相統の残滓をどめつつも、なお兄弟相継ぐ風があった、と考えられる。

(9) 内藤虎次郎博士は、呉が太伯の末孫なりということも、申公巫臣が教えたのではないかと思う、と云われている。「春秋時代」(支那上古史・一六八―一九頁)

(10) 「呉の発展と申公巫臣」歴史と地理・一二巻二号

(11) 楚は熊渠が「我れは蠻夷なり、中国の号諡に与らず」と号して三子をいづれも王に封じたり、熊通も「我れは蠻夷なり云々」と云い自立して王号を称したり、荘王にいたっては洛に至って周の鼎の輕重を問うなどの不敬を敢てしていることが、史記・楚世家にみえる。

(12) これにふれている論文はかなりあるが、最近発表せられた論文を一つあげておく。

市川建二郎氏「イン・吳越と太平洋諸島文化」民族学研究・廿五の一・二号・一〇頁

(13) 太伯・仲雍の話には、後世多くの話が附会せられた。

二人を孝子にしたてあげたから、太王の死に際して太伯は、はるばる父のもとに趨むいて喪に服することになり、季歴としても兄の太伯が来てみれば、そのまま家を継ぐこともできないので、二人の間に家督の譲り合いが行われる、ことにされた。(呉越春秋・卷一・呉太伯伝(論衡・卷二三・四諱)。

このような儒教道德的な話は、すべて太伯が孝道のために家を棄てたとされたために、更に附会が行われたのである。論語・泰伯第八に、「子曰く、秦伯はそれ至徳というべきなり、三たび天下を以て譲れるも、民徳として称するなし」などであるのをみると、この話は相当古くできたのであろう。

(14) 鳥居龍藏博士「倭人の文身」(有史以前の日本・七七五―八〇頁)

呉王(夫差)は「我れは文身なり、礼を責むるに足らず」(史記・魯周公世家)などと云っている。してみれば寿夢の頃には、なおさら文身の風が行われていたのであろう。

史記・呉太伯世家の集解に「応劭曰く、常に水中に在り、故に其の髪を断ち其の身に文して以て龍子に象どる、故に傷害を見ず」とか、漢書・地理志の粵地の条に「帝少康の子、会稽に封じられ、髪を断ち身に文して以て蛟龍の害を避けり」とか、江下流域の aborigines が水中での傷害をまぬかれぬための magic として tattoo をほどこしていたことを記している。

太伯と仲雍が、季歴を避ける手段として文身したと云うことについて、梁玉繩は二人は遠く荆蠻にまで奔り、周人はその

所在など知るよしも無いのに、殊更このようなことをする必要もあるまいと怪しみ、呉の地方に行われた水中蛟龍の害を避けるための文身を、呉に君とせられた太伯が、庶民と同じくなぜほどこさねばならなかったか、司馬遷の謬りではないか、と疑っている(史記志疑・卷十七)。この巧妙に作られた話も、作り話である以上、どこかに無理があるのである。

(15) 史記・呉太伯世家

集解に「杜預曰く、呉は太伯の後なり、故に長と為す」

(16) 国語・卷十六・鄭語

西に虞・虢・晋・隗・霍・楊・魏・芮あり(中略)この子男の国にしては、虢と邰とを大なりとす

(17) 上原淳道氏「虢の歴史および鄭と東虢との関係」古代学・六巻二号。樋口隆康氏「虢国銅器考」東方学・第廿輯

(18) 国語・晋語・二。孟子・九・万章章句上。同書・十二・告子章句下

(19) 史記志疑・卷二十一

宮之奇、晋の虞に仮りて虢を伐つに因り、故に虞・虢の始祖を挙げて之を言う

(20) 左伝の「伝」にみえる宮之奇の言は、太王の「子」を「昭」に、「亡れ去る」を「従わず」に、王季の「子」を「穆」に作つてある外は、まったく同文である。史記と左伝との間に、または両書の(あるいはどちらかが)拠った全たく別個な文献との間に、連関があった、ことは疑いないところである。

(21) 滝川龜太郎博士は、史記の呉太伯世家の贊の「春秋の古文」について、「春秋の古文は即ち左氏春秋伝なり。劉歆の太常博士に与うるの書、許慎の説文の序証すべし」と云っておられる。(史記会注考証・卷三十一)

(22) 左伝の著作時期については、改めて云うまでもなく、古来多くの論が行われてきた。津田左右吉博士は、左伝をすぐに春秋というの普通の慣例ではないのみならず、春秋の古文という称呼が何の意義があるか、も問題にされて「春秋の古文」を左伝を指すものとは解しておられない。博士は左伝を前漢末の儒家の所作とされている。「文献上からみた左伝述作の時期」(左伝の思想的的研究・第一章)

(23) 虞の成立をこのように説明したために、後に多くの解釈や説明が附け加えられた。たとえば宮之奇の言に、太伯・雍仲は太王の昭なりとあるのについて、武王が仲雍の曾孫屈章の弟の仲を夏虚に封じ、ここに北呉または西呉ができたが、なお虞とは呼ばなかったのに、呉には虞の音があるので、虞と称し、周章の弟の仲を虞仲と称するようになった、しかし武王の封建の真意は、あくまで周章の弟の仲には無くて仲雍にあったので、虞の真の祖である仲雍を虞仲と呼ぶようになった、など云う解釈である。竹添進一郎博士「左氏会箋」これなどは、本文に述べたようにたまたま虞と云う国が在ったので、呉をこれに関連せしめたので、呉に虞の音があるので、呉より分れた北呉または西呉を、虞と呼ぶに至ったので、もとよりない。「太伯・虞仲は太王の子なり」の虞仲を

説明しようとして、後より附会せられたものに相違ない。

(24) 錢大昕によれば、于と於とは音がやや異なる(十駕齋養新錄・卷一・于於の条)と云うが、やはり同音を写したものである。

(25) 顏師古の句呉についての注「句の音は鉤、夷俗語の祭声なり、また越を於越と為すがごとし」漢書・卷二十八下・地理志・呉地の条